

# 日本記者クラブ会報

第 435 号  
2006 年  
(平成 18 年)  
5 月 10 日 発行

〒一〇〇一〇〇一  
東京都千代田区内幸町二ノ二ノ一  
日本プレスセンタービル  
© 社団法人 日本記者クラブ  
http://www.jnpc.or.jp

## 羅大使と民主党・韓代表の会見

これも小泉流といふべきなのだろう。先月の「竹島周辺調査」騒動のことだ。大体、新聞で読むまで国際水路機関（IHO）なんて全く知らなかった。そこが6月に開く「海底地形名称に関する小委員会」で、韓国名表記を提案する動きに対しての日本政府の措置だったといえるだろう。今回は一応阻止した感じだが、ことはそんなに単純ではないだろう。

紙の社説を読んで、本当に新聞は大それた再認識した。60か70行くらいで、各紙色合いの差はあるが問題点、歴史的、政治的背景などを正確に分かりやすく整理し、解決方法を示している新聞もあった。つくづく新聞は日本社会の「父性」だと思つた。こうした点を、一般の人たちに理解してもらう努力と工夫をしなければならぬ。

おかげで先月の羅鍾一大使昼食会

(19日)と韓

和甲・民主党

代表会見(21

日)ははから

ずも絶好のタ

イミングにな

った。当然、タ

イミングがよ

すぎれば、ゲ

ストの発言は

最初にお招きいただいたことに心から感謝を申しあげます。また時には権力と対峙し、民衆の利益擁護のためにさまざまな事柄の報道にご尽力いただいていることに深い敬意を表します。

21世紀が平和と人権の世紀であり続けるためには、最大のカギは報道の自由が維持できるかどうかではないかと考えています。そういう意味で、これからもぜひみなさまに頑張ってくださいたい。

(平山正剛日弁連会長昼食会 4・17)

一層慎重になる。それでも韓国側の反応や言い分の背景を考えるうえで参考になったのではないだろうか。

さすがにお二人とも冷静だった。

柔らかな表情の羅大使は(大使館を出

る直前まで想定問答に取り組んでい

たそうだが、こう切り出した。外交

官とプレスの仕事は関心事が重なり

ます。マスコミはよい記事を書くこ

とに一生懸命です。外交官は、そうし

た記事をなくすることが仕事です。

自身の学生運動体験から、民主化

の担い手に育っていった教え子たち

のこと、一度は志をもって議員にな

ったことなどを語り、短期間に近代

化を猛進してきた今日の韓国社会の

生い立ちや特徴を説明し、理解を求

める内容と受けとった。

先人の墓にツバして前進するよう

な、ツバした当人もまた後人にツバ

されるような激しい革新性。こちら

は島国なので、冷戦後の変化も微温

的だが、韓国は前と後とは全く違

っている。便宜的にすぎるとさえ感

じるほどだ。お互いさまだが、隣人

を理解するには忍耐と努力がいる。

3月のハンナラ党・朴権恵代表に続いて、金大中前大統領の側近だった民主党の韓代表が今回クラブでの会見を積極的に希望してきたように、歓迎すべき変化も多い。訪韓する日本の有力政治家たちも、こうした点は見習うべきだろう。

### クラブ賞は受賞者なし

まったく残念な結果になってしまった。4月20日に開かれた理事会で、本年度の日本記者クラブ賞受賞者なしが決定した。

締め切りの1月末日までに、今回は7人の候補が推薦された。推薦委員会(3・1 委員長 細野徳治会員)の評価報告を受け、選考委員会(4・6)で選考した結果が、橋本達明委員長から答申され、理事会によって承認された。受賞者なしは第1回以来5回目。

推薦理由に添付された記事例、著書、ビデオなどを約1カ月かけて検討していただいた、委員の方々のご協力にあらためてお礼を申しあげたい。

理事会はまた、1月5日に急逝された新聞協会の村上重美前専務理事の夫人・安子さんから寄せられた50万円を、クラブ賞基金に繰り入れることを決めた。(専務理事 岩崎玄道)

## 片山虎之助 参院自民党幹事長

4・5(水) 昼食会 司会 玉知夫  
理事 和田圭委員 出席 137人

### ▼通信放送「6月決戦」を前に気炎

この日は、自民党で通信及び放送政策のかじを取る「通信・放送産業高度化小委員長」として登壇した。

党内きつての実力者が小委員長を兼務するのは、初代総務相という片山氏の肩書以上に、いわゆる「竹中懇」へにらみをきかせるためである。

竹中総務相は今年1月、松原聡・東洋大教授を座長に据えた非公開の私的懇談会を設置し、通信と放送に関する法制度と業界の改変に着手した。橋本元一・NHK会長、和田紀夫・NTT社長らに対するヒアリングを終え、5月には答申を出す方針。竹中総務相は答申内容を、6月の「骨太の方針」に盛り込む構えだ。

一方片山幹事長も、年明けから月2、3回のペースで小委員会を招集。こちらも通信・放送

事業者に対するヒアリングを終え、意見集約に着手した。竹中懇の答申をめぐり、来るべき論戦に向け、党としての理論武装を進めている



構図が俯瞰できる。

片山幹事長の昼食会は、この構図を色濃く反映したものとなった。

竹中懇については、「制度、法律を変えるのは、手の届く話ではない。政府与党がどう考え、国会をどう通すかだ」と強調。松原座長についても「懇談会メンバーになると、天下の三分の一は取ったような顔をする。謙虚でなければ」と厳しく批判した。

返す刀で、民放についても「低俗番組が相当ある。自粛の仕組みが機能しているのか」と指摘した。

技術の進歩で、通信と放送の垣根は低くなった。放送と通信の違いは、番組内容に「公共性」という十字架を背負うか否かのみとも言われる。道を踏み外せば、放送はその存在意義を失う——との警告に聞こえた。

自治官僚出身でありながら、良い

意味で「うるさ型」の党人とされる、

片山幹事長の面目躍如だった。

読売新聞メデア戦略局

中村 文陽

## アルベルト・ロムロ フィリピン外相

4・5(水) 記者会見 司会 中井良則  
委員 通訳 宇尾真理子 出席 45人

### ▼甥に継承される基本外交

先行する韓国、シンガポール、タイ、マレーシアに続き中国、インドの人口大国も経済大国への道を歩みはじめ順調に発展するアジア。緒方貞子氏はJICA理事長就任直後、当クラブでの記者会見で今後は活動領域をアジアからアフリカヘシフトさせていく可能性に言及した。



のは質疑を通じて明らかにされた地域協力機構の役割とその場における

大国(特に日中両国)の協調に寄せる期待の大きさである。

実は、私は1969年にマニラのマラカニヤン宮殿で当時のカルロス・ロムロ外相にインタビューしたことがある(アルベルト・ロムロ現外相はその甥にあたる)。その時、同

外相は「東アジアの安定には日米中の4大国による安全保障の枠組みが不可欠だ」と語ったのである。

時あたかもベトナム戦争の真っ最中。名だたる反共国家の外相の予想外の発言に一瞬、ヒアリングの間違いではないかと思っただけだった。

それから約40年、ロムロからロムロへ。「大国間の地域的な協調があつてこそ、はじめて自国の安全と発展が確保される」というフィリピン外交の基本的な思考は脈々と受け継がれているようだった。

個人会員(日本経済新聞出身)

鈴木 孝信

アン・ベネマン ユニセフ事務局長

4・11(火) 記者会見 司会 井田由美  
委員 通訳 澄田美都子 出席 24人



▼行動力と温かいまなざし

米ブッシュ政権の農務長官から1万人のスタッフを率いる国連児童基金(ユニセフ)事務局長へ。

履歴書からは「鉄の女」を想像していたが、会ってみるとどこか柔和な感じさえ受ける。何より印象的なのは、世界中を飛び回る「行動力」と、発展途上国の子どもたちに向けられた温かい「まなざし」である。例えばスマトラ沖地震やパキスタン地震。発生後すぐに自ら現地を訪れ、災害に泣く子どもたちの様子を見届けた。パキスタンでは、犠牲者7万3千人のうち半分が子ども。中でも、校舎が崩壊し下敷きになって亡くなった児童らが1万7千人にも上るといふ事実には「本当に難しい(状況だ)」とつぶやくように語った。

「ユニセフが特に力を入れているのは女の子を学校に就学させること」とも。事務局長は、女の子の就学に否定的な国が今も数多く存在すると指摘、「女の子に教育の機会を与えることで、早すぎる結婚などの問題を防ぐことにもなる」と教育の重要性を訴える。

世界各地を訪れ、肌で実感したのは「子どもたちはみな学習する意欲がある」ということだと言う。

最近訪れたタンザニアでは、小学校をせつかく卒業しても中学校のスペースが限られているため進級できないのはほんの一握り。子どもたちは口々に、どんなに自分が学校に行きたかったかを事務局長に訴えた。

中学に進むのが当たり前の日本では想像もできない現状だ。体験に基づいたエピソード一つ一つが説得力を持つ。

戦後、ユニセフから粉ミルクの配給を受けて復興を遂げた日本。高度成長を終えたころの70年代に生まれ、た筆者ではあるが、あらためて「恩返し」の必要性を痛感した。

共同通信外信部

田中 寛

増田 寛也 岩手県知事

4・12(水) 昼食会 司会 三橋清一理事  
菅沼堅吉委員 出席 67人

▼後藤新平の自治三訣

全国知事会会長の座を麻生渡・福岡県知事と争って1年余。知事会の地方分権推進特別委員長を務め、麻生体制を支えてきた。

この日の会見も、三位一体改革の総括、第2期分権改革や道州制への見解といった国と地方のあり方をめぐる問題が中心だった。

三位一体改革では補助金削減のうち、特に「公共事業関係の補助負担金4兆円余が手付かずだった」と不満を表明。田建設官僚出身だけに、知り尽くしている公共事業関連補助金のむだにメスが入らなかったのが歯がゆいようだ。

今や三位一体改革にかわって飛び交うのは「歳入歳出一体改革」の文字ばかり。国の歳出削減の照準に合



わされるのが地方交付税だ。増田氏は政策誘導的な交付税廃止など改革案を示した。

ただ、第2期分権改革で税源移譲をさらに進めても、税源の乏しい自治体は補助金削減が税源移譲額を上回り、交付税での穴埋めを求める。

一方、唯一の不交付団体である東京都は交付税による地方への安易な補てんには難色を示す。この東京問題をどう解決するのか。「東京は日本の顔であり、国の直轄地にしないと根本的解決にはならない」と言い切った。当然反論も予想される。

11年前に増田氏を知事選に擁立した小沢一郎氏が民主党代表に就任した直後の会見。初当選後、両氏は微妙な関係にもなったが、「各論についても詳しく論じてほしい。これは小泉さん(首相)も同じ」と両党首に注文も。

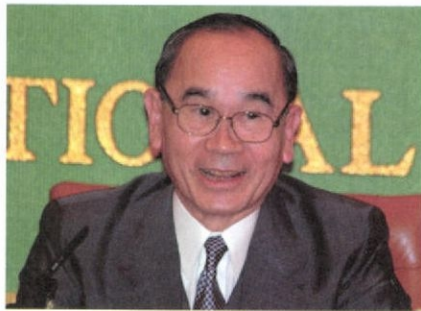
岩手出身の政治家、後藤新平が晩年説いた「人のお世話にならぬやう人に御世話をするやう。そしてむくいをもとめぬやう」という「自治三訣」を紹介して会見を終えた。

日本経済新聞社編集委員

中西 晴史

平山 正剛 日弁連会長

4・17(月) 昼食会 司会 野方正治監事  
 普沼堅吾委員 出席 61人



前に掲げた。

▼法曹三者 得失超えた取り組みを

「誠実だが、どちらかといえれば味で、指導力に欠ける」と言われてきた平山氏だが、この日の発言には自信が感じられた。

2月の日弁連会長選で、全国52の単位弁護士会のうち、41弁護士会の信任を得た。会長選の「常連」の感もある高山俊吉氏だけでなく、企業からの信頼が厚く、著名度も抜群の久保利英明氏にも大差を付けた。その圧勝ぶりだが、新会長としての自信を支えているのだろうか。

選挙では、(1)裁判員制度などの司法改革を全面的に推進する(2)質を維持しつつ法曹人口を一定程度に拡大させる(3)平和な社会に向けて現行憲法の重要性を訴える——との考えを前面に掲げた。

とくに、二人の兄を先の大戦で失い、「戦争は絶対にしちゃいけない」との母の言葉を胸に刻む平山氏にとって、護憲は個人的に避けて通れない主張だったようだ。こうした見解が今回、大きな支持を得た。

だが、ちよつと待ってほしい。各種世論調査によると、裁判員制度には国民の6―7割が反対している。平山氏は、理解不足が原因との考えだが、果たしてそれだけなのか。

護憲の主張についても同じだ。日弁連は昨年11月の人権大会で、「憲法を国民の行動規範にしようとする改憲論議」を否定したが、その主張も、多くの国民や野党を含む国会議員らの考えとはずれが生じている。

つまり、弁護士の世界での共通認識は必ずしも、一般国民の賛同を意味するものではないのである。司法改革の目指すところは、国民主体の司法を実現することだ。そのために必要なのは、法曹三者それぞれが旧来の考え方にとらわれず、自らの集団の得失を超えて課題に取り組んでいくことだろう。

読売新聞社会部次長 石井 一夫

大日方邦子 パラリンピック金メダリスト

4・18(火) 四つ会 司会 斉藤道雄委員 出席 26人



▼パラリンピックメダルの価値は?

大日方さんのホームページを事前に調べて「すごい人ですね」と緊張しながら傍聴した女子学生が、終わった後「普通の人でした」と心を和ませた。世界の第一人者が高ぶらず、飾らず、数々の悩みを率直に語ってくれたからだろう。

パラリンピックのアルペンのレベルは大会ごとによがっている。障害の種類や程度で細分化されていたレースも3つのカテゴリーに集約された。メダルの数も激減。それに、出場資格はワールドカップなどの成績で決まる。パラリンピックの競技化に選手は大賛成だが、レースに専念するには時間とカネが要る。どうやって確保するか。リーダー大日方さんの最大の悩み、と受け止めた。

彼女によると、アメリカ、ドイツ、オーストリアでは企業からの支援が一般化している。日本で同じことが実現するだろうか? CMに起用してもらえないだろうか? できないのはなぜ? 障害者を取り巻く「タブー」があるから? パラリンピックはマイナースポーツだから? 広く世界を見てきて、障害者アスリートと企業の間を「これからの時代はギブ・アンド・テイクだ」と考えている大日方さんにとって、日本の現状は歯がゆいようだ。

「パラリンピックのメダルの価値って何だろう、と自問自答しているが自答はできない」

いら立ちはあるのだから、それを柔和な笑顔と語り口の中に溶かし込んで話

し続けた。選手には観客、企業には消費者である私たち、そしてメディア、も答えを求められている。

障害者も健常者もないじゃないかという話も出た。オリンピック、パラリンピック両大会を統合して、障害者競技もひとつの種目とする時代は来るのだろうか。

個人会員(朝日新聞出身)

旗野 寿雄



羅<sup>ラ</sup> ジョンイル  
鍾<sup>ジュン</sup>一<sup>イル</sup> 駐日韓国大使

4・19(水)昼食会 司会 国分俊英理事  
角南源五委員 通訳 李仁賢 出席 12人

▼あわや「激突」かというときに

日韓関係が最悪の時に当たった。今回のスピーチに、大使は「新たな韓日関係の展望」とタイトルを付けた。しかし、竹島周辺での日本の海洋調査をめぐり日韓激突かという情勢、関心はどうしてもいまの両国関係に。取材する側には実にいいタイミングだったが、対日外交の責任者としては慎重が必要だったに違いない。

2年前に就任したとき、「未来指向的関係の維持」「格式にとらわれない首脳会談の年2回開催」が使命だった。しかし「その後は継続して関係悪化してきた」のが実情だ。原因は「日本から出てきている」と、政治家の神経を逆なでする発言や竹島の日制定などをあげた。

竹島海域の海洋調査は「日本の歴史歪曲の延長線上のこと」、首相の靖国参拝は「外国に誤ったメッセージを与える」など、盧武鉉政権の対日政策の忠実な表明だった。

小泉首相の靖国参拝には、韓国だけでなく日本国内にも反対論は強い。それに日本の方からみると、盧政権はあまりに過去にこだわり、かためすぎるきらいがある。しかし、微妙な時期、公式発言しかできないのは無理からぬところか。

日韓の国交樹立から40年。皮肉なことに、両国関係をリードすべき政治の分野だけがぎくしゃくし、それ以外の関係は実によくまわっている。為政者の仕事の一つは、国内の偏狭なナショナリズムを抑えることだ。なのに日韓首脳はむしろあおる方に回っている。外交官の仕事にはおのずから限界がある。

「日韓が追求する理念は同じ。この地域の不安定要因をうまく管理するため、両国が安定の核になるべきだ」「日韓関係は良くなるべきだし、よくすべきだ」。今回、もつとも強調したかったところだろう。

東京新聞論説委員 小林 一博

韓<sup>ハン</sup> フア ガ  
和<sup>ワ</sup> 甲<sup>カ</sup> 韓国民民主党代表

4・21(金) 記者会見 司会 春名幹男委員  
通訳 永野慎一郎 大東文化大教授 出席 63人



▼韓国政界の大きな変動予測

韓国政治の「三金時代」を率いた3氏を名前のアルファベット2文字で略称することが多い。金鍾泌氏はジョンピルだからJPだ。金泳三氏はYS、金大中氏はDJである。

韓和甲代表は「リトルDJ」と言われてきた。風貌がそれとなく似ているためだけではない。政治の世界に入ってずっとDJに師事してきたからだ。軍事独裁の政権下、韓国のメディアには書けないことが多かった。韓和甲さんはそんな頃、民主化運動の旗手たるDJを支える秘書として、日本メディアのソウル支局を回っては情勢を探ったという。

民主党はもともと、南西部の全羅道を地盤とするDJ党である。DJに続いて盧武鉉氏も大統領に当選さ

せた与党だった。それがいま国会定数299のうちわずか11議席の弱小野党になった。代表としてこの党を守り発展させたい。だから党を割って出た盧大統領と与党ウリ党に対する強い反感を会見で見せた。

曰く。「全羅道の人たちは圧倒的な支持を与えたのに、盧大統領から感謝の言葉さえ聞いたことがない」「ウリ党に行った人間は理念ではなく権力のためだ。盧大統領の権力がなくなれば、党もなくなる」……

5月末の統一地方選でウリ党が惨敗すれば「韓国政治の構図に相当な変化がある」と語る。来年末の大統領選に向け、最大野党ハンナラ党も含む政界再編を予想し、「民主党はそこで主導的な役割を果たす」と決意も披瀝した。

会見は、竹島近海の測量調査を日本が計画して日韓の波風が立った時期と重なった。日本に歴史問題で「良心的な対応」を求め、「粘り強い対話の必要」を訴えたうえで「両国が衆知を集め、子孫に恥ずかしくない歴史を作りたい」と結んだ。

朝日新聞編集委員兼論説委員

小菅 幸一

鈴木 修 スズキ会長

4・21(金) 開む会 司会 稲田好美委員  
出席 88人

▼ふるさととは現場の油の二オイ

売上高が2兆5000億円にもなれば、誰が見ても立派な大企業に違いない。それでも自らを中小企業と言ってはばからない。それが嫌みにならないのは、好々爺然とした風貌故だろうか。「アルトで歩こう」のキャッチフレーズが懐かしい初代アルトの発売が79年で、社長就任はその前年。

以来30年近くにわたって最前線で陣頭指揮し、「四輪ではどん尻」だったスズキを軽自動車トップにまで押し上げた。

経営手法は堅実そのもの。現地現物を徹底し、トヨタ自動車を擁する自動車業界のなかにあっても、その「ケチケチぶり」は際立っている。「2兆5000億円はあくまで取扱高。完成車メーカーは部品を右から左へ流しているだけで、本当の売上高は3000億―5000億円程度」なんて理屈は、並の経営者からは出てこない。業績面では順風満帆そのもののス



ズキだが、最近になって脚光を浴びたのは、筆頭株主で最大の提携先でもあったゼネラル・モーターズ(GM)との絡み。GMが経営危機に陥り、保有するスズキ株の大半を手放したからだ。そのすべてをスズキ自身が買い戻したわけで、考えてみれば良い迷惑。それでも「今でも感謝しているのは、ウチが自動車メーカーとしてここまで

来られた背景にはGMの指導、協力が絶対欠かせなかった」と言っている。鈴木家に婿養子で入る前は銀行員だったはずだが、「モノづくりのト

ップは、機械で焼けた油のにおいがオレのふるさとのおい、あれがたまらない」という言葉が自然に飛び出す。よく日産自動車のカルロス・ゴーン社長がGM再建人の候補に目されるが、私ならこの人をまず挙げたい。

日刊工業新聞第一産業部

尾本 憲由

ジヨゼ・マヌエル・バラージ 欧州委員長

4・24日記者会見 司会 杉江良之理事  
通訳 西村好美 宇尾真理子 出席 83人



▼「説得の政治」のお手本

見るからに柔和で誠実そうな印象を与えるバラージ氏である。ポルトガルに生まれ、国際政治学者、国会議員、国連顧問、政治指導者(外相や首相)を歴任し、豊かな経歴を買われて欧州委員長に就任した。

質疑は政治、経済、安全保障から歴史、文化、伝統に至るまで実に幅広いテーマに及んだが、どの問題にもメモも見ずによどみなく、ていねいに答えてくれた。同時通訳の人に気の毒なほどに内容の濃い45分間となり、欧州の奥の深さが人物に体现されているようにも感じられた。最近の欧州は、EU憲法の批准失敗や若年雇用をめぐるフランスの暴動など、欧州統合の動きが一時的にせよ頓挫して、「内向きの時代」へ

の反動に揺さぶられているような気がしてならなかった。

その点を質問したところ、バラージ委員長は「単発の事象に目を奪われず、長い傾向で見てほしい」と熱弁をふるった。60年前の欧州、30年前の欧州、15年前の欧州……。歴史を長い目で眺めれば、「欧州は着実に政治的にも経済的にも開かれた方向へ向かっている」というのだ。

豊かな知識と経験をもとにひたむきに説明する姿は「説得の政治」を旨とする欧州の知恵と蓄積を聴衆に印象づけたのではないだろうか。「ワシントン・レビュー政治」に流れたり、国民にじっくり説明する場に消極的な日本の与野党指導者とも異なる。言葉よりも先に手が出てしまいがちな(っ)米国ともひと味違う。

共通の課題と共通の価値観を備えた日本と欧州の関係について、バラージ委員長は「自然な戦略的パートナー」と例えた。豊かな歴史と政治的知恵に支えられた欧州の航跡は示唆に富む。日本にとっても、貴重な学ぶ材料にしていきたい。

毎日新聞論説副委員長

高畑 昭男

沈 潔 浦和大学教授

▼中国の深刻な年金、高齢化問題

中国でも少子高齢化が急速に進んでおり、すでに高齢化率(65歳以上)は7%を超えている。これまでは無尽蔵で安価な労働力の供給が経済の急成長を可能にできた。ところが生産年齢人口はあと7、8年もすれば減り始め、いずれ労働力不足時代がやってくる。経済成長にも大きな影響を与えかねない。

沈潔氏によれば、中国の少子高齢化には(1)高齢者の絶対数が多い(2050年には4億人を超える)(2)高齢化スピードが速い(3)高齢者の分布に地域差がある(上海市は1979年に早くも高齢化率が7%を突破)(4)日本などと比べ経済成長レベルがまだ低い段階で高齢化を迎える、といった特徴がある。



日本と中国の年齢別人口構成グラフを比べてみると、2つの山が存在する(第一次・

4・25(火)研究会「中国経済」⑨  
司会 藤村幸義委員 出席 59人

第二次ベビーブーム)など全体の形は極めて類似していて、「なるほどこういう分布をしていると高齢化問題が起きるのか」と納得する。

ところがより子細にみると、山谷の落差は中国の方が大きく、いずれは日本よりも深刻な少子高齢化問題に悩まされるのではないかと予感させる。

財政面への影響はすでに表れている。養老年金をみても、財政面からの補てんは年々増える一方である。養老年金のカバー率はまだ3割程度でしかないのに、早くも財政圧迫要因になっている。医療保険や失業保険はより深刻な状況にあるらしい。いかにして社会保障の財源を確保するか。沈潔氏は(1)国有資産を社会保障基金に移転する(2)養老年金債券を発行する(3)福祉税を導入する、などと具体的に提案している。

しかし政府の対応は後手に回っていると言う。これでは駆け足でやってくる少子高齢化に間に合わないのではないかと、そんな思いを強くした。

個人会員(拓殖大学教授)

藤村 幸義

広瀬 道貞 民放連会長(テレビ朝日会長)

4・28(金)記者会見  
司会 和田圭委員 出席 16人



▼民放は公共的基幹メディアか

「テレビに批判が集まっている。新聞を含め基幹的メディアへのプレッシャーは強い」――新任の民放連会長は切り出した。ホリエモンとL

F・フジ、楽天とTBSなど民放が標的の事件で、前民放連会長は「民放にも公共性がある」と防戦の正当性を主張したが、世論は視聴率競争と低俗な娯楽番組が目立つとして民放の公共性に疑問を投げた。新会長は前会長とどう違うだろうか。

その民放に、目下の最大課題は地上波のデジタル化に違いない。新会長は「民放の運命を決する大事業をなんとかしても成功させる」と決意を述べる。ローカル局を含めテレビ局側の負担と同時に、受像機買い替えを迫られる視聴者側の大問題も指摘

したのは、送り手側としては珍しい。通信と放送の融合論は「地デジ困難地域」解消法としても論じられているが、竹中懇談会の議論をけん制しつつ、競争導入でコンテンツの質が上がるとする説は「リアリティーに欠けリスキー」と強調する。しかし、放送の公共的責務と通信の社会的任務の違いをおさえた上で、放送に通信の新技术を活用する道をさぐる意見もある。

民放の公共性とは何かについて、民放の経営者、社員がしっかりと認識を持てば、NHKに対してもすっきりとした姿勢を打ち出せるのではないかと。受信料についても、NHKの政治的独立についても、他人の話ではなく、放送に携わるものに共通の課題としての方向が明らかになる。きつい部分はおしつけ、おしい部分だけ民放では世論は納得するまい。

民放はいかに公共的基幹メディアか、視聴者、国民へ率直に語ることで、個別の課題より、ナショナル・プレスクラブでは求められよう。

個人会員(朝日放送出身)

岡村 黎明

# 青瓦台からの“使者”

## —戻ってきた質問状—



小井土 有治

人生には多くの出会いと様々な驚きがある。私は1961年3月に大学を卒業し、翌月には日本経済新聞社の「政治部記者」になり、首相官邸の記者クラブに配属された。日本を高度経済成長時代に導いた池田内閣時代で、主な仕事は官房長官の定例記者会見に出席するほか、「首相番記者」として官邸や首相私邸での来訪客を見届け、話を聞くことであ

った。当時の池田番記者は首相私邸での見張り役が夜の10時ごろに終わると、今度は大平官房長官の私邸に夜回りをするのが慣例だった。

4月2日、初めての番記者の任務を終えて大平邸で官房長官に名刺を差し出してあいさつし、各社の官房長官担当記者団とともに懇談の席に加わった。その4日後、2回目の懇談に参加した際に、大平長官が小生

に近づいてきて「ああ、小井土君」と呼びかけてきた。たった2回目の出会いなのに、新米記者の名前を覚えていてもらったことが最初の大きな驚きだった。「アー、ウー」を連発して話の本筋がつかみにくい大平長官だったが、総選挙で多くの有権者を引き付け、手強い政治記者を味方にする秘密を知った感じがした。

2回目の大きな驚きというか、奇妙な体験をしたのは、バングラデシュ独立戦争を取材したニューデリーに次いで、2度目の海外勤務をした1970年代後半のソウル特派員時代である。当時は「一人独裁」と韓国マスコミや野党の金大中、金泳三両氏（いずれも民主化後に大統領に就任）などをはじめとする反

体制派から厳しく批判されていた朴正熙大統領が青瓦台（大統領官邸）で絶大な権力を握っていた。

筆者が送稿した当時の記事を読み返してみると、次のように韓国では民主勢力が激しく弾圧されていたことが歴然としている。

「金大中氏、禁固一年 ソウル地裁」（1975年12月）、「国家安保を最重点 朴大統領年頭会見」（76年1月）、「朴政権の退陣要求 韓国民主勢力が救国宣言」（同年3月）、「金大中氏らを連行、尹潽善氏（元大統領）も取調べ 『民主救国宣言』問題」（同）、「民主救国宣言」（大統領）緊急措置九号に違反 金大中氏処罰を表明 韓国首相」（同）、「維新憲法は撤廃せよ 尹前大統領、朴政権を批判 救国宣言公判」（同年6月）、「北朝鮮兵と衝突 米将校二

人死ぬ」（同年8月）、「金大中氏に懲役八年 民主救国宣言 ソウル地裁」（同）、「金大中氏らに減刑判決 控訴審で懲役七年 民主救国宣言事件」（同年12月）、「（詩人の）金芝河氏に懲役七年」（77年1月）、「金大中氏ら実刑確定 大法院が上告棄却」（同年3月）、「新たに『民主救国憲章』 金大中氏らの実刑に反撃 尹氏ら発表」（同年3月）。

現在は民間の「韓流ブーム」と裏腹に日韓両国の政治的関係は冷却化しているが、当時の両国関係も険悪な雰囲気包まれていた。当時、両国関係は東京で起きた金大中氏の拉致事件で悪化していたが、これを決定的にしたのは、筆者が赴任して1カ月半後の光復記念日（74年8月15日）の式典で、在日韓国人が大統領を狙って撃った流れ弾で大統領夫人の陸英修女史が非業の死を遂げたことである。凶器のピストルが大阪の交番から盗まれたものだったことが反日運動を一気に燃え上がらせた。標的の日本大使館は、連日のように日本政府の公式謝罪を求める多くのデモ隊の大波に取り囲まれた。日経ソウル支局は日本大使館の隣の韓国日報ビル内であったので、筆



者は毎日、血気にはやるデモ隊の中を通り抜けて支局に出勤しなければならなかった。もつとも、「最前線の現場」にいたわけで、「大使館前、男が割腹」の状況や「日の丸」引き下ろし引き裂く、デモ隊、大使館に乱入（74年9月）などの重大事件を自分の目で直接見ることができた。他紙の特派員から電話で情報提供を求められるという経験もした。

大統領の記者会見は日本人記者に門戸が開かれていなかったが、こうした状況だったから、「一人独裁」と呼ばれる「一人」に直接会い、質問したいという願望がふくらんだ。赴任して間もなく経済担当の副総理や外務部長官と単独会見したことはあったが、支局の窓から毎日眺めていた青瓦台は「近くて非常に遠い存在」だった。門戸を閉ざす理由の一つは「日本の言論は偏向している」ということのようにだったが、そうなる取材する側は門戸を開放している反体制側に情報を求めざるをえなくなるという面もあった。金大中氏の自宅には取材で何度も訪問し、金泳三氏や尹元大統領には自宅に招かれたこともある。尹元大統領がご馳走してくれた自家製の開城キムチの

味は格別で、うまさはまだ舌に残っている感じもするほどである。

特派員という身分では朴大統領と会見することが不可能なのが分かったので、次善の策を考えることに方向転換することにした。そこで考えついたのが、大統領宛に韓国の国内問題や日韓関係についての質問内容を書いた手紙を出し、書面回答を得たいということである。慎重に考えて質問状を書き、助手に翻訳してもらった書状とあわせて封書に入れて発送した。赴任直後から「日本の特派員監視」という任務を遂行するためだろうと思うが、毎日のように支局に顔を見せる韓国中央情報部（KCIA）の部員の「皆勤」ぶりには変化はないが、青瓦台からも全く新しい風は吹いてこなかった。

天災は忘れたころに起きるといいますが、大統領からの書面回答へのはかない期待を諦めようと支局の窓から青瓦台を眺めていたところ、一人の韓国人が部屋に入ってきた。身分は青瓦台の役人だという。一瞬、「おお、願いがかなったか」と期待したところ、青瓦台からの使者の話は期待とは程遠い予想外なものだった。

彼はおもむろに一通の封書を差し出して、丁寧に「受け取ってください」と言うのだった。その封書を見ると、

なんと筆者が朴大統領宛に発送したものであった。「えー、一体どういふことなのか」と思ったが、質問状が青瓦台に届いたのは確認できたわけである。一見したところ、封書は開封もされていないようだったが、いったん出した封書を受け取るわけにはいかない。「青瓦台のゴミ箱にでも捨ててください」と受け取りを拒んだが、相手は一向に引き下がらない。ついに根負けして、「受け取らなければ、青瓦台の使者にされた下級職員がづらい立場に立たされるのだから」と同情して、封書を受け取った。

その後、保存すべきだったかもしれない封書を支局のゴミ箱に投げ入れた。もう再び返送されることはない。この体験を、名外交官でソウル大使も務めた亡き須之部量三さんを偲ぶ会で再会した往時の特派員仲間と話したところ、「質問状が青瓦台に来たこと自体を否定したかったのだから」との答えが返ってきた。筆者の思いと完全に一致である。

独裁的政権の背景には「半島の冷戦」という事情があったが、日韓国交正常化、「漢江の奇跡」と呼ばれた韓国経済の復興・発展を成し遂げ

たのも朴大統領である。昨年9月、日本労働ペンクラブ訪韓団の団長としてソウルを訪れ、韓国労働ペンクラブの方々や労使関係者にお世話になったが、日本と同じく、成熟国の悩みであるいわゆる「非正規職」の増大、格差問題や少子化問題が焦点であることが強く印象に残った。

去る3月9日、日本記者クラブは韓国の野党ハンナラ党の朴槿恵代表を招いた。にこやかな笑顔を問近に見て、「青瓦台令嬢」が若くして「ファーストレディ役」を健気にこなした姿が脳裏に浮かんで感慨深かった。だが、両親とともに非業の死で失った深い悲しみを乗り越えて政治の世界に生きる強い意思も感じさせられた。

女性政治家としてはネールの娘で非業の死を遂げたインディラ・ガーンデー首相に会ったことがあるが、韓国でも初の女性大統領が登場するのであるか。

こいど・ゆうじ会員 1961年日本経済新聞入社 政治部次長 論説委員 早大講師 日本労働研究機構理事を経て 現在 労働評論家 日本労働ペンクラブ代表 東京都労働委員会公益委員 連合総研監事 日本人材派遣協会理事も兼ねる 著書に「人材派遣業法」「外国人労働者」「連合運動史第三巻」など

## ●小沢民主党新代表

## 変身? メディアに積極対応へ

▼人羅 格

(毎日新聞社)

小沢一郎・民主党代表が就任し、約1カ月が過ぎた。「偽メール」事件で地に落ちた党の信頼を立て直すという重責を担い、「まず私が変わる」とニュー小沢路線を打ち出している。

上だろう。テレビ中継を見ながら、多くのベテラン記者が複雑な感慨を抱いたに違いない。

の船出。4月23日投票の衆院千葉7区補選では早くも「選挙の小沢」の面目をほどこした。その小沢氏が、記者会見などのメディア対応の積極化を掲げていることは、重要だ。政権獲得が本当に実現できるかを測るうえで「メディアVS小沢」の推移は、有力な指標となる。

「ごこちない関係」——。小沢氏とメディアの関係を端的に評すると、こうなる。

「みなさんに対する態度をちょっとよくしろとか、そういう意味での変身もまた図らないとならない」。4月7日、代表就任の記者会見で、小沢氏がメディア対応についてこう語ると、会場は笑い声に包まれた。しかし、小沢氏のメディア対応に本当に苦労してきたのは、現場よりも「もうひと世代」年長のデスク級以

最初に両者の関係が緊張したのは、小沢氏が非自民政権の樹立に成功し、権力の絶頂にあった細川、羽田政権下の新生党代表幹事時代。93年8月、細川非自民政権の発足を受けて小沢氏は「記者会見を開かれたものにす」と宣言。「だれでも出席でき、何でも聞ける」と触れ込み「メディアと政治」の仕切り直しに乗り出した。

ところが間もなく、小沢氏は記事の内容が不正確として、新聞2紙の記者を会見場から排除した。抗議した記者団に「会見はサービスタ」と

言い放ち、会見そのものも取りやめた。翌94年、今度は発言報道をめぐり特定の新聞を「アカ新聞」呼ばわりして批判、メディアの強い反発を呼んだ。

野党・新進党の党首となってからも「一部分だけ報道する」などと不満は絶えず、定例記者会見が途絶えることがあった。側近議員が次々と袂を分かち離れていくことと同様、メディア対応の混乱は剛腕・小沢氏の「わがまま」イメージの象徴となった。

しかし、何が幸いするかわからない。私は、こうした対応が、皮肉なことに政治家としての「鮮度」の維持に結果的に役立った、と考えている。

小沢氏は座談などでよく「政治家年齢」という言葉を用いる。政治家には実際の年齢とは別に、バッジをつけて何年か、という別年齢がある、との理屈だ。63歳の小沢氏だが、1969年初当選、当選13回と議員キャリアはすでに長老級。今回の代表選出馬で「この戦いに私の政治生命のすべてをつぎ込む」と訴えたゆえんだ。

ただ、長い政治キャリアにもかかわらず小沢氏のメディア的な鮮度は

高い、とみている。これまで露出を抑え、メディア(特にテレビ)を活用する戦術を取らなかったためだ。18日の初定例会見は「ニュー小沢」の一環として位置づけられ、60人も記者が参加した。このことは、小沢氏の積極対応が意外性ゆえに成功する可能性を示す。

その初会見では予定を10分オーバーし記者の質問に笑顔をまじえ応対したが、4月11日の秋谷栄之助・創価学会会長との隠密会談を問われると「会っていない」と一転、にべもなかった。通常、この種の質問はノーコメントでかわすものだが、「会っていない」ではミスリードになりかねない。

小泉政権が5年の長寿を保った秘訣は高支持率の維持であり、映像を中心とするメディア対策がこれを支えたことは言うまでもない。しかし、劇場政治と露出重視はともすれば政治家の賞味期限を急速に縮め、ある種「使い捨て」的な残酷さも併せ持つ。

小沢氏とて、その例外ではない。だからこそ、「ラストチャンス」なのだ。

ひとら、ただし 1985年入社 政治  
部官邸キャップなどを経て 04年10月か  
ら政治部副部長

## ● 射水市民病院

## 呼吸器取り外し事件との格闘

▼ 棚田 淳一

(北日本新聞社)

決着どころか、未だ詳しい事実さえ明らかになっていない、射水市民病院の人工呼吸器取り外しについて、さていったいどこから何を書いたものか。頭を抱えてしまうその「事件」は、3月25日に発覚した。豪雪後の北陸・富山によりやく春本番を告げる青空が広がった日だった。

「安楽死」「尊厳死」、そして県警の捜査。それだけでも1面トップを飾るに余りあるが、2000年から昨年10月の間に「7人が死亡」という前代未聞の出来事だった。

直感的に思ったのは「大展開になる取材に、われわれ自身が振り回されてはならない」ということだった。病院、当事者である外科部長、患者家族、捜査状況など、翌日から新聞各紙とテレビはさまざまにニュースを伝え続けた。だが、問題の根底には「死を避けられない患者の延命中止」という行為について、是非を

断じる社会的コンセンサスがないう実態がある。これを踏まえた問題提起がなければ、表層だけを追いかけた報道になってしまう。日本人はこれまで、死に対峙する議論を避けてきたようにも思う。

実は、このタイミングで問題が発覚したのは(適切な表現ではないが)「幸運」でもあった。昨年12月から、私たちは地域医療の在り方をテーマにしたキャンペーン企画「いのちの回廊」を展開中で、メイン連載でがん告知や終末期医療をあつかった直後だった。

問題が明らかになるとともに、社会部に連載取材班全員(といっても4人だけ)が合流。初日から医療現場の実態を検証する緊急連載もスタートさせた。

ところが、である。全国紙が投入してくる取材陣はこちらの予想を上回っていた。問題発覚直後から20人を超える記者を投入した社もあった。地元紙でありながら、頭数では日によってこちらが劣勢という有り様。すぐに県内の支社、支局からも記者をかき集めて態勢をつくり直すことになった。

死亡した患者7人について病院は「すべて家族の同意があった」という。苦労したのが7人の患者家族の特定だった。本当に同意があったのか、それはどんな状況で行われたのか、家族の証言は欠かせない。

唯一の手がかりは「おくやみ」欄だった。北日本新聞では毎日、亡くなった人の名前と喪主、自宅、葬儀日時を市町村別に掲載している。射水市で1日平均3人が亡くなるとすれば、1カ月で90人。最初の取り外しがあつた2000年から数えると6000人以上。何割かは年齢で除外しても、大変な数である。市外からの通院も考え、周辺自治体も対象になった。

過去の新聞綴りをめくり、手分けして順番に電話でつぶした。実は患者家族だったが、一巡目の電話では「違う」と言われて引つかからない例もあつた。相手の事情を考え、言

葉遣いも丁寧にと心がける。何とか家族の証言で社会面を飾れたのは、地味で根気のいる作業を続けた結果だった。

一方で病院は、最初の会見で概要を公表した後、「警察の捜査」と「患者家族への配慮」を理由に、7件の具体的な内容について述べていない。実際はカルテを含めた資料すべてを警察に提出。外科部長からの聞き取りも一部についてだけで、病院自体がまともな調査、検証を行っていないのだ。これでは、警察に「丸投げ」したと言われても仕方がないだろう。

起きたのは医療過誤ではない。専門家である医師が、結果を予想して行った行為だ。司法が裁けるのは問題の一面面に過ぎず、もし不起訴になれば何も明らかにされず、本格的な議論もないまま終わる危険さえある。カッコよく言えば、私たちにとって本当の仕事はこれからだ。

たなだ・じゅんいち 1980年入社  
社会部 文化部 文化部長などを経て  
05年10月から編集局長兼報道本部長

◇東北楽天2年目◇

# 地域協力で経営黒字 次は「勝率アップ」

▶日下 三男  
(河北新報社)

プロ野球東北楽天ゴールデンイーグルスの星勘定がどうも上がらない。知将の呼び声高く、その手腕が期待される野村克也新監督の目指す野球は今のところ道半ば。地元ファンからは「羽ばたかないイヌワシ」に、ため息が漏れるばかりだ。

健全経営、強いチームづくりとともに、球団運営の柱に地域密着を掲げる楽天。河北新報は今年1月から、このチームの略称を地域に一層根付いてもらいたいという願いから「楽天」から「東北楽天」とした。

だが、この熱い思いはチームになかなか届かない。4連敗、一つ勝つて5連敗、ちよつと勝ったと思うと、



めったにない東北楽天の勝利に、ファンはまるで優勝でもしたかのように歓喜、歓喜＝4.12 フルキャストスタジアム宮城

またまた連敗…。「勝つたらビール半額」のサービスをする仙台市内のある居酒屋の店主は「でもね、負ければ負けたで、お客さんは野球の話（さかな）に結構うれしそうに飲んでるんだ」と苦笑する。この複雑な感情は、かつての阪神ファンに似ているものかもしれない。

球団はプロ野球参入1年目の昨年、売上高73億8500万円、営業利益1億5600万円を計上。親企業が

ら赤字補てんしてもらっているのが通例のパ・リーグ球団としては異例の営業成績だ。黒字の要因は、115人いる球団職員の営業努力はもちろんだが、何よりも宮城県から県営のフルキャストスタジアム宮城を管理運営する権利を得ていることが大きい。年間使用料は通常なら県立都市公園条例の定めによれば1億6400万円なのに、7割もの減免措置を受けて4920万円。格安の球場使用料を払うだけで、球場に飲食店を入れたり、看板広告を募ったりと多彩なビジネスを展開できるのだ。このことは、中央のメディアであまり紹介されておらず、球団の経営黒字は地元の協力があつたからこそ実現した、と強調したい。

一方、メディア側の営業成績はどうだったのか。昨季合わせて16試合を実績中継したNHKや民放テレビ4局は総じて「プラス？」とんでもない。関東圏に比べて経済の足腰は弱いし、CMスポンサー料にも限界があつた（ある民放局幹部）と渋い表情だ。

編集はそうも言ってもらえない。何しろロッテ以来28年ぶりに仙台を本拠地とするプロ球団。読者の期待も高く、主要スポーツ紙は支局の開設

や記者を増員しただけに、弊社の担当記者4人は取材競争に神経をすり減らした。田尾安志監督の続投が解任かで騒ぎ始めた昨年8月末からの1カ月間は、球団幹部、球界関係者への聞き込みに奔走。何とか「田尾解任」を他紙に先んじて報じることができたのは幸運だった。

仙台には今、東北楽天以外に、サッカーJリーグ2部のベガルタ仙台、バスケットボールbjリーグの仙台89ERSがある。国内で三つのプロ球団を持つ都市は、東京、大阪を除けば仙台だけだ。感動、歓喜。スポーツドラマの舞台が着実に広がりを増している。

一口メモ 仙台市とプロ球団

東北楽天は昨季、本拠地フルキャストスタジアム宮城の主催試合で観客92万人を集めた。1試合平均1万4619人。球場の客席数に対する入場者数の割合は73%と12試合中5番目。仙台市（人口約102万人）にはこのほか、Jリーグ2部ベガルタ仙台、bjリーグ仙台89ERSのプロ球団がある。昨季、平均1万5934人でリーグ1位。東北楽天がなかった04年季（1万6198人）から微減となったが、2位札幌の1万1138人を大きく上回った。89ERS（エイティナイナーズ）は仙台市の市制施行（1889年）、政令指定都市への移行（1989年）の年に因んで名付けた。今季創設されたbjリーグに参画した。

くさか・みつお 1982年入社 報道部長などを経て 04年からスポーツ部副部長

◇全国初の民間刑務所◇

# PFI方式が地元企業参入の障壁に



▶永山 啓一  
(中国新聞社)

民間の資金やノウハウを活用するPFI方式を、全国で初めて導入した刑務所「美祢社会復帰促進センター」の建設が、山口県美祢市で進んでいる。誘致決定当初、地元では雇用や定住人口の増加、食材や物品の納入といった経済効果への期待が膨らんだ。だが、PFI方式が掲げるコスト優先の考え方は、弱小な地元資本にとって事業参入の高い障壁となっている。2007年4月の運用開始まであと1年もない。市や経済団体は早急に手を打つ必要がある。「PFI方式の建設、運営はコスト重視。直ちに地場企業が参入でき、

大きな利益が生まれるとは限らない」。4月16日投票された美祢市長選で、再選を果たした小竹伸夫市長(70)は翌日の会見でこう述べた。過疎・高齢化という同じ悩みを抱える全国50以上の候補地との競争の末、誘致にこぎつけた。刑務所を核とした地域経済浮揚のプランを描く市にとって、地元企業の参入はぜひ実現したい課題である。

美祢市は、1970年に主力産業の炭鉱が閉鎖。ピーク時に4万人いた人口は現在半分以下に落ち込んでいる。刑務所の建設場所は、市中部から北西8キロにある炭鉱住宅跡に整備した28ヘクタールの元工業団地。97年から分譲を始めたが、不況で一区画も売れていなかった。

計画では初犯受刑者男女計千人を収容。「地域との共生」を狙い、高い塀の代わりに生け垣に似せたフェンスを巡らす。市立病院にない婦人科診療所をわざわざ所内に設置し、市民にも開放する。

市は、刑務所で働く職員や家族500人による消費と生鮮食品や日用品の地元業者からの納入などによる経済効果を年間7億4千万円と試算。パートを含めた新たな雇用も1



元工業団地で建設が進む「美祢社会復帰促進センター」

50人程度見込む。

ただ、事業の進展につれ厳しい現実も浮かび上がる。PFI方式の最大の目的は徹底したコスト削減だ。国と、大手警備会社を中心とする共同企業体でつくる特別目的会社との契約は20年間で517億円。国が建設、運営するより約48億円の削減効果があるとされる。

このしわ寄せを受ける一つが受刑者の食事代だ。山口市の山口刑務所で一人一日約520円なのに対し、共同企業体が提示したのは400円台。野菜など一部食材は安価な中国産を調達するという話も漏れ聞く。

地元産品の納入をもくろんでいた市の計画はあてが外れ、参入を断念

する農家や業者が相次いでいる。商工会の役員は「年間を通じて買い取ってもらえる契約は魅力だが、採算割れてまで納入するのでは何の意味もない」と手厳しい。

「特産のハウレンソウの袋詰めや竹材製品づくりの委託など地域振興につながる連携を考えたい」とする小竹市長。雇用と人口が増えるメリットはある程度見込める半面、経済効果を確実に取り込み、関連ビジネスをどう育てていくか。まちづくりに向けた取り組みはこれからだ。

ながやま・けいいち 2003年入社 社会・経済グループを経て、同年8月から山口支社

## 一口メモ 美祢市

人口 1万7641人(2006年3月1日現在)  
世帯数 6507世帯(同)  
面積 228.25平方キロメートル  
山口県の中西部に位置する。四方を山に囲まれ、人口は県内13市で最少。明治時代から始まった石炭の産出は日露戦争時に本格化。大嶺炭鉱の無煙炭は、軍艦の燃料として重宝され、全国有数の産出地となる。1970年、エネルギーの石油転換で相次ぎ炭鉱が閉鎖された。同じく明治時代から産出している石灰石は今でも主要産業。化石の産地としても知られる。現在、秋芳町、美東町との合併協議が進行している。

●新聞との相互依存

黒岩 徹

「テレビが娯楽と逃避に走っている」——エド・マローが語る言葉は、現代日本のジャーナリズムを直撃する。ジャーナリストが時の権力の横暴さや時代の流れを拒否する姿勢をもたねばならないことを、マローは身をもって示した。だが日本のジャーナリズムがどれだけ「拒否」してきただろうか。むしろ、時の流れに抗することを批判するジャーナリズムの声が高かったのではあるまいか。

マローの毅然とした姿に、自らの襟を正さねば、との思いを何度もさせられたが、ほっとしたのは、テレビと新聞の関係である。マローらは、新聞から材料を拾い、新聞の反響によって支えられた。おそらく新聞もマローの自由を敢然と守る姿勢に鼓舞されたにちがいない。一部の体制翼賛的記者を除いて。

テレビと新聞の相互依存関係はジャーナリズムの健全な発展に必要不可欠なのである。

（毎日新聞出身）

良心的な映画だった。テレビ報道に関わる身にとっては他人事でない。赤狩りに敢然と立ち向かったエド・マローたちの姿は確かに感動的なだけけれど、彼が生きていたならば、眩いものではなからうか。「そんなに私を偶像化しないでくれよ。ならばCBSはその後なぜ私を追放したんだい。それに、今、君らは何と、どう戦っているんだい？」——

実際、マローはテレビニュース時代の進展の中で、CBSから契約を切られ、彼の仲間たち（マロー・

ボーズ）と呼ばれた）は辛酸をなめた。映画の冒頭とラストでマローが演説するシーン。今から48年前、全米のテレビ局幹部らを前に行ったこの演説で、マローは、放送の「公共性」を忘れ、営利主義に狂奔するテレビ界を激しく糾弾した。この演説は、「公共性」が「時価総額」に覆われる日本のテレビ界の現在を鋭く射抜いている。（TBS報道局長）

「See it Now」が改めて問いかけられるもの、そして今、「Good Night & Good Luck」が訴えかけるものは限りなく根源的で重い。政治的な圧力を含む様々なプレッシャーは過去も



●テレビの現在を射抜く

金平 茂紀

●揺るぎない志

渡辺興二郎

●戦うキャスターから学ぶ

春名 幹男

秀作である。全編モノクロの画面で、感情を押し殺した主演のデヴィッド・ストラザンが、テレビメディアの本分を静かに説いてくれる。

エド・マローは確かに戦うキャスターだった。相手はマッカーシズムというモンスターだ。CBSテレビは彼のおかげで、長い間「ニュースのCBS」という名声を博した。ワシントンのナショナル・プレス・

毎週火曜日の夜10時半から30分間、米国の視聴者は極めて良質なテレビ報道に接することができた。それは約50年前のことであり、ごく限られた期間ではあったが。

現在も、そして将来も存在するだろう。エド・マローの立ち居振る舞いに見るべきは、結局のところ、その揺るぎない志なのだ。マローとマローボーズが掲げたいまつを、今、我々はバトンタッチしているのか。社会を覆う一時的な激情は、決して過去の遺物ではない。半世紀前と明らかに異なり、二度と逆戻りできないのは、キャスターがカメラの前でタバコを吸いながら視聴者に語りかけることぐらいであろう。

大使館の協力を得て、映画の試写会に続いて「ワインの会」も開かれ、約200人がニュージーランドの文化と味覚を楽しむ夕べに。

NZと言えば、「人間よりも羊の方が多い」ということで、「酪農の国」というイメージが強いが、マッカーサー駐日大使によると「モダンな側面も分かってほしい」のだそう。映画産業もその一つとなつている。5月中旬に東京・六本木で1週間開かれたNZ映画祭も、そうした広報活動の一環として行われた。

ニュージーランド・ナイト(4.12)



マッカーサー大使と中井良則企画委員

実はワインの輸出促進も政府が力を入れているものの一つ。98年以來進められている「経済構造改

革」の一つとして農業に対する政府からの交付金が廃止されたが、同時に農業の多角化が奨励される中で浮上したのがワインの生産と輸出だ。農業は羊だけではありませ

かといえればロシアやフィンランドのような「寒い国」の飲みものと思つていたので、ここでも「知らなかつたNZ」を知ることになつたナイトだった。

ん、というわけ。

「ワインの会」といっても、大使館から提供されたのはワインだけでなく、「子羊の串焼き」などお国料理が10種類とビールやウオッカもあるという盛りだくさん。ウオツ

お預けになつた森首相昼食会

先月25日に予定されていた森首相の昼食会は、当日午後1時から国会で「水俣病公式確認50年決議」採決が入つたため順延に。連休明けで日取りを再調整することになった。「二人が争うようなことになつたら、私は会長をクビだ」(4・17)と述

べ、総裁候補の一本化に意欲を示した最大派閥の領袖の登場が、この会報が出るころまでに決まっていればよいのだが。

千葉7区の補選で勝利した民主党の小沢代表にも、代表就任直後に招待状を届けているので、こちらもおたのしみに。

■会議報告  
第353回企画委員会

(4・4 宴会場)

テレビ東京の委員交代(岡田晃氏から広瀬和彦経済部長)を報告した後、今後のゲスト候補などを協議した。

出席 宇治委員長、山田、中井(良)、橋本、中井(康)、脇、矢島、宮田(一)、稲田、菅沼、飯野、井田、角南、和田、広瀬、三好、柴田の各委員。

2006年度クラブ賞選考委員会

(4・6 大会議室)

クラブ賞推薦委員会の細野徳治委員長の報告を受けた後、選考に入り、内規による投票の結果、「受賞者なし」を決め、理事会に答申した。

出席 橋本委員長、喜多、住田、国分、宇治、石村、金平、島田、小櫃、玉川の各委員。滝鼻理事長、吉田副理事長、岩崎専務理事。

第271回会報委員会

(4・7 小会議室)

5月号の編集について協議した。  
出席 住田委員長、石田、仙石、高橋、豊田、西田の各委員。  
第344回会員資格委員会

(4・13 小会議室)

日本経済新聞の委員交代(芹川洋一氏から泉宣道編集局次長)を報告した後、5月1日付の会員人退会を審議し、理事会に答申した。

出席 喜多委員長、高畑、伝川、泉、山本、工藤の各委員。

第33回監事会 (4・14 大会議室)

2005年度の会計監査を行った。  
出席 野方、山本、笹原の各監事。

第91回総務委員会

(4・20 小会議室)

2005年度の事業報告・収支決算ならびに次期繰越収支差額処分案(次期繰越収支差額6,057万4,610円のうち、退職準備積立預金、資産準備積立預金、クラブ賞積立預金にそれぞれ1,000万円積み増しし、3,057万4,610円を繰り越す)を原案通り承認した。

出席 橋本委員長、住田、国分、小櫃の各委員、滝鼻理事長、吉田副理事長、岩崎専務理事。

第423回理事会

(4・20 大会議室)

①2005年度の事業報告・収支決算ならびに次期繰越収支差額処分を総務委員会案通り承認した。②本年度クラブ賞は受賞者なしとすることを決定した。③故村上重美会員の遺族からの寄付50万円をクラブ賞基金に繰り入れることを決定した。④役員の一部交代(19ページ)を承認した。

出席 滝鼻理事長、吉田副理事長、岩崎専務理事、橋本、住田、国分、三橋、村松、妹尾、小櫃、玉、佐藤(重)、高木、佐藤(嘉)の各理事。野方、山本の両監事。

「リレーエッセー」

ミュンヘン五輪②  
(1972. 9)



記者村のバーで  
すっかり飲み、部

屋に戻って寝込んだ。ノックの音でドアをあけると、いまは亡き深代悼郎（当時、朝日新聞ロンドン総局長、のち『天声人語』）がパジャマ姿で立っていて、いつもの悠々たる口調で告げた。

「選手村でテロらしい、と東京がいつてきた。ちよつと行つてみるかい？」

夜の色から未明の藍色に移ろうとしている空のもと、現場に駆けつけると、ゲリラの立てこもった

◇将棋の会 プロ指導対局

4月8日(土)

大野八一雄6段を迎えての5カ月振りの指導対局に9人が参加しました。結果は、日比野和幸会員（朝日出身）が前回に続き二枚落ちで、石川（事務局）が飛車、香落ちで、それぞれ金星をあげました。

今期の名人戦について、大野プロ

イスラエル選手団宿舎は、金網の外から見える位置にあった。中には入れない。金網に顔を押しつけるようにして見つめた。

朝になると一般の見物人たちは軍隊に排除されて、報道関係者

金網越しにゲリラの顔…

▼轡田 隆史

500人ほどが、宿舎に近い金網の外に群がっている。

装甲車や武装兵たちが宿舎を遠巻きにし、屋根の上では何人も狙撃兵が、銃を手にはらばいになって狙いを定めている。トレーニング姿に変装した警官の手には自動小銃だ。

建物の陰から陰へ、じりじりと接近して行く。宿舎の窓からゲリラの顔がのぞいた。浅黒いほだに縮れ毛の長髪だ。こちらを見て、白い歯を見せた。落ちていた様子だ。目出し帽の男もいる。

交渉がはじまったらしく、背広姿の出入りがしきりだ。窓から身を乗り出して、どこかに向かつて手を振る人も

友人が殺された、というイスラエル人の女性が、「お前たちは平和の場を人殺しに使った」と英文で書いたプラカードを掲げて、人がきの前に進み出た。未明から現場を走り回り、近くの

●囲碁の会

4月22日(土)

4月の例会には23人が参加しました。好成績を上げたのは田川五郎、石川基、栗木欽一のみなさん。

3人とも全勝でしたが、特に石川、栗木のご両人は先月に続いで全勝。これで石川さんは6連勝、栗木さんはなんと9連勝ということにな

公衆電話（ああ！ケータイはまだなかった）から深代さんや東京に連絡したり、原稿を送ったりしているうちに、夜だ。

ヘリの爆音が響き、こうこうとライトを輝かせて、わたしたちの頭上を飛び去っていった。

やがて郊外の空軍基地で銃撃戦となったあと、オリンピック組織委員会の発表は「人質無事」から「全員死亡」へと転々とした。

わたしたち朝日勢は、競技を続けるべきか、中止すべきか、大激論になった。

わたしの脳裏で、議論はいまも続行中だ。「ミュンヘンの悲劇」は、パレスチナやイラクで現在も進行中だ。

（当時朝日新聞社会部記者）

りました。また、宮沢昭二郎さんも3勝1敗で優秀賞を獲得しました。

今回は柴田鉄治さんの紹介で牧野賢治さん（個人D会員 毎日出身）が初めて参加されました。

次回の例会は5月27日（土）午後1時から宴会場で行います。飛び入り入会も大歓迎です。

（河野）





3月3日、90歳で亡くなった宮崎吉政さんを偲ぶ会が4月21日、10階大ホールで開かれた。300人を超す盛会で、政治記者としてのキャリアと人徳を改めて印象付ける集いだった。

太田博夫発起人代表に続いて、中曾根康弘、園田天光、三木睦子、渡辺恒雄、渡部恒三、今井久夫、そして細川隆一郎の各氏がエピソードを交えて故人を語り、その別れを惜しんだ。1940年の読売入社以来、軍応召時を除いて、一貫して政治を見つめ、とくに戦後の政界の表裏を足で捕らえて報道してきた生涯を称える挨拶が相次いだ。とくに、晩年

### 戦後政界の表裏を追い続けて

も書き続け、最後まで小林秀雄全集、ギボンのローマ帝国衰亡史など大部の著作を繰り返し読み通していたことは、会場をうならせていた。

「吉田内閣打倒でがんばった」若き盟友のころを語り(中曾根)、政治のあり方に情熱を燃やす在りし日を偲び(園田、三木)、そして三羽カラスとして若い記者時代のあれこれを披露し(太田、細川)、社会党結党大会を取材したところのある唯一の生き証人を甦らせていた。

参加者の幅は広く、政界は現役、リタイア組の自民から共産まで、マスコミも新聞、テレビのほとんど主要全社から、また合気道や早大関係など、多様かつ老壮青男女にわたっていて、宮崎さんの人脈の広さを示していた。

中締めで、お嬢さんの中村三千代さんが寂しさを多少とも補うかの答礼の辞。参会の方々は宮崎さんの似顔をプリントした日本記者クラブ製の金属のしおりが記念に贈られた。

個人会員

羽原 清雅

写真＝読売新聞社

### 昭和一ケタの迫力

日弁連会長72歳。スズキの会長76歳。静と動と正反対ではあるが、共に昭和一ケタの生まれ。二つの会合は、気力、意欲、強靱な精神の競演のようだった。

平山さんは熊本・菊池市の出身。まさしく肥後もっこす。フロント掲載のように、冒頭で「ときに権力と対峙するプレス」に敬意を表し、「21世紀が平和と人権の世紀であり続けられるかは、報道の自由の維持にかかっている」と。

新会社法の施行(5・1)やM&A時代の到来で、中には大人数の立派な事務所所属し、高収益を得る弁護士たちも。が、会長の事務所は新橋の雑居ビル。すれ違えば肩がふれ合うような狭さらしい。「金もう

### ●春のゴルフ会

お疲れ オメデトウ 小橋幹事

第87回日本記者クラブゴルフ会は前日の荒天がウソのような絶好のゴルフ日和となった4月28日、相模カントリー倶楽部で開かれました。優勝カップを手にしたのは、いつも忙しく幹事役をこなしているクラブ事務局の小橋幹事(ネット69)。2位

けより高い志を」と訴え、2月、大差で日弁連の新しい顔に選ばれた。「平和と人権」一本の信念の人は、古武士のようだった。

鈴木修会長の方はゴムまりのように活動的で陽性だ。テーマはお任せで招いたが、黙っていてもプレスの関心に焦点をしぼり、インド進出などアジアでのビジネス体験を語ってくれた。焼けた油のニオイがする工場の現場に立てばアイデアが出てくるといふ、鈴木会長ならではの名語録続出だった。

きわどい質問には、おとぼけで逃げたが、トップの世代交代については、堂々と会長統投を宣言。社長を22年つとめ、会長として7年目へ。つねに緊張感のなかに身を置き変化に適應する、経営者としての生き方が、元気の素なのかも。(女)

遠藤勝巳会員(76)、3位川田泰弘会員(77)という成績でした。

19番ホールでは、名門の特徴であるバンカーといかに戦ったかで盛り上がりましたが、この反省を秋のゴルフ会に生かせれば、優勝も夢ではない?

幹事(日本プレスセンター)

柿原 健

## 情報発信

クラブ施設では会員による各種の会合が行われています。企業や大使館などの賛助会員も記者発表の場としてクラブを利用しています。

## ■2005年度ボーン上田賞授賞式

国際報道で優れた業績を挙げたジャーナリストに贈られる「ボーン・上田記念国際記者賞」が毎日新聞ロサンゼルス支局の國枝すみれ記者（38）と共同通信外信部の砂田浩孝記者（32）に贈られた。國枝氏は占領軍の検閲で公表されなかった米紙記者の長崎原爆ルポを60年ぶりに発見。砂田氏はパキスタンのムシャラフ大統領と単独会見し、核科学者カーン博士が北朝鮮にウラン濃縮技術や遠心分離機を提供していたことを認める発言を引き出した。（4. 3 宴会場）

## ■HAPPY NEWS 2005表彰式～春の新聞週間～

読んでハッピーな気持ちになった新聞記事と理由を読者から募集した新聞協会のキャンペーン。2回目の今回、大賞に選ばれた記事は北陸中日新聞の「ごみ出しまかせて」。足の不自由な近所の年配女性に代わり朝のごみ出しを続ける中学生を紹介したもの。選考にあたった「新聞メディアの強化に関する委員会」の滝鼻卓雄委員長（読売新聞）から大賞・入選作10点に表彰状が贈られた。入賞作品は新聞協会ウェブサイト（<http://www.pressnet.or.jp/>）に掲載されている。（4. 5 10階ホール）

## ■新聞をヨム日 公開シンポジウム「活字文化があぶない！——メディアの役割と責任」

新聞の特殊指定の見直しを公正取引委員会が検討している中、新聞協会が主催。北村正任新聞協会長、鈴木恒夫衆院議員（活字文化議員連盟代表幹事）らの挨拶に続き、柳田邦男氏が基調講演。藤田博司早大客員教授（共同出身）をコーディネーターに大学教授、弁護士らがパネル討論した。参加者は約400人。詳報が12日付各紙朝刊に掲載された。（4. 6 10階ホール）

## ■アジア開発展望2006

アジア開発銀行が恒例のアジア諸国の経済見通しを発表した。06年東アジア経済全体は7.7%成長だが、中国経済は拡大抑制などの理由で07年は7.1%に。南アジアはインド・パキスタン経済がやや減速するため06年は7.3%に鈍化するが、07年は7.5%に上昇すると予測している。詳細はアジア開発銀行のウェブサイト（<http://www.adb.org>）に掲載されている。（4. 7 10階ホール）

## ■日本新聞協会 議員連盟と懇談

活字文化議員連盟会長の中川秀直自民党政調会長をはじめ各党の代表や新聞協会理事など約250人が出席。「特殊指定堅持」に向けて意見を交換した。（4. 19 10階ホール）

照会先：日本新聞協会 Tel：03-3591-4402

## ■未来をひらく日本委員会 第100回記念特別セミナー

同委員会（尾畑雅美代表・NHK出身）は民間の次世代を担う若手の錬成の場として毎月勉強会を開催している。100回記念として日本経済新聞社の杉田亮毅社長が

## 新しいOB会員

「日本経済の新時代」のテーマで講演した。参加者は約250人。小島順彦三菱商事社長、三田敏雄中部電力次期社長、井戸敏三兵庫県知事らの顔も。（4. 20 10階ホール）  
照会先：未来をひらく日本委員会 Tel：03-3592-9500  
<http://www.nihoniinkai.com/>

## ■東京新聞 第255回「読者と対話の日」

読者と編集幹部が交流、懇談する会。今回は「格差社会」をテーマに、同紙の新・旧市民リポーター約20人と水野和伸編集局長、各部幹部らが意見を交換した。（4. 22 10階ホール）

照会先：東京新聞読者応答室 Tel：03-3740-2736

## ■読売塾・特別講座「だれにでもできる脳の鍛え方」

新聞や本など活字の音読が脳力アップに大きく寄与することを提唱している東北大学の川島隆太教授が講演し、科学的根拠などを解説した。（4.22 10階ホール）

照会先：読売・日本テレビ文化センター Tel：03-3642-4301

## ■緊急国際シンポジウム「もうひとつのアジア安全保障—鳥インフルエンザ問題を考える」

アジア調査会がアジアの安全保障の観点から鳥インフルエンザの影響を考えるためにシンポジウムを主催した。パネリストは押谷仁東北大学大学院教授、李明亮台湾国家衛生研究院主任、デニス・ノーマイル米誌「サイエンス」日本支局長。（4.25 10階ホール）

照会先：アジア調査会 Tel：03-3211-1616

**バー、レストラン、宴会**

予約電話 和食3503-2723 洋食3503-2766

**吉富  
カクテル****5月：Sea-Horse <タツノオトシゴ>**

5番目の干支、辰をテーマにしたオリジナル・カクテルです。ラム、ブルーキュラソ、グレープフルーツジュース、グリンデンなどでアレンジした爽やかな味をおためしください。

**和食****皐月懐石コース (6月3日まで)**

穴子、いさき、なすなどで初夏を演出してみました。出来具合は目と舌でご確認ください。グラス冷酒付きで5250円です。(板長：薬科浩)  
先付：枝豆腐 鰻芥子和え お椀：蛤真丈 水前寺のり ささがき人参 生もの：刺身三点盛り 焼物：いさき焼きひたし 煮物：焼き茄子雲丹寄せ 石川芋 はす芋 揚物：矢はね蓮根帆立いこみ 食事：焼きおにぎり 茶漬け 水菓子：西瓜

**洋食****初夏のヘルシーコース (5月15日～6月30日)**

前菜、メイン、デザートを含めても424キロカロリーというヘルシーメニューを用意しましたので、お試しください。ランチタイムにも提供します。コーヒー、パンがついて2890円です。

前菜：伊勢エビと色鮮やかな野菜のゼリー寄せ(168Kcal)  
メイン：和牛もも肉の薄切りと野菜のオイスター炒め(230Kcal) デザート：フルーツマトのコンポート(26Kcal) (シェフ：黒須修一)

**<訃報>**

下記の会員の方々が死去されました。謹んでご冥福をお祈りいたします。

▼本沢義雄会員 (朝日新聞、60歳) が4月7日呼吸不全のため▼木谷忠会員 (名古屋テレビ放送、朝日新聞、84歳) が同10日肝不全のため▼田所泉会員 (日本新聞協会出身、73歳) が同18日脳内出血のため▼小池民男会員 (朝日新聞、59歳) が同25日食道がんのため▼竹谷俊雄会員 (日本経済新聞、61歳) が同28日食道がんのため▼小林義一会員 (時事通信出身、78歳) が同29日腹部動脈瘤破裂のため

**<会員現況>** 法人会員 147社 基本会員 809人  
個人会員 1,664人 法人・個人賛助会員 75社 183人  
特別賛助会員 74人 名誉・功労会員 10人  
計 222社 2,740人

**クラブの電話 ダイヤルイン**

和食レストラン (9階)	会員事務
3 5 0 3 - 2 7 2 3	3 5 0 3 - 2 7 2 5
洋食レストラン (10階)	経 理
3 5 0 3 - 2 7 6 6	3 5 0 3 - 2 7 2 8
貸室予約、宴会打ち合わせ	
3 5 0 3 - 2 7 2 4	
受 付	会見申し込みアドレス
3 5 0 3 - 2 7 2 1	kaiken@jnpc.or.jp
クラブ行事への申し込み	URLアドレス
3 5 0 3 - 2 7 2 2	http://www.jnpc.or.jp

**会報委員会**

委員長 = 住田良能  
委員 = 石田昭彦 伊藤三郎 仙石伸也 高橋利行  
豊田 宰 西田善夫 松本侑子  
連絡 = 長谷川和子 本庄五月  
(電話 03-3503-2752 FAX 03-3503-7271)

**イルサン大使が帰国のあいさつに**

エドヨノ大統領の会見などでお世話になった、インドネシアのアブドゥル・イルサン大使が帰国のあいさつに事務局を訪れた(4.17)。ニュージーランド、オランダでの大使としての経験と東京での3年間を総括して『インドネシア外交官の目から見た日本』を出版したばかり(ラウンジの書棚に寄贈書がある)。

「靖国神社の遊就館へ行ったら、自分の国の独立が1949年となっていた。終戦2日後に独立宣言したときが独立記念日であり、ショックだった」という。それで、戦後直後の歴史部分を加筆し、独立戦争に千人もの旧日本兵が参戦したことなども盛り込んだとか。

ちなみに子どもの高校時代の世界史の教科書を見ると、こんな記述に。「日本の敗北直後に国民党のスカルノらが独立を宣言し、独立を認めないオランダとの間に4年にわたる独立戦争をつづけ、1949年にインドネシア共和国の独立を認めさせた」。

大使は帰国後退官し、マカッサル(スラウェシ島)の大学で教鞭をとるとのこと。(石川)

**5月24日に記念講演と会員懇親会**

すでにご案内のように、5月24日(水)午後4時半から、著書『国家の品格』がベストセラーになっている、藤原正彦お茶の水女子大学教授を迎え、総会記念講演会が開催されます。テーマは「日本のこれから・日本人のこれから」。引き続き5時半から、会員懇親会も行われます。記念講演会、懇親会いずれもビジターおひとりを伴っていただいて構いません。多数の参加をお待ちしております。

**■理事交代**

静岡新聞社 村松重治東京支社長(旧・秋山勇雄氏)

**■法人会員代表変更**

東北放送 高橋邦夫東京支社長(旧・木村成忠氏)

HP <http://www.jnpc.or.jp/>

**「会見速記録」：4月の新規掲載**

●長谷部恭男東大教授「立憲主義と平和主義」(2006.3.13) ●朴権恵ハンナラ党代表「韓日関係の新しいビジョン」(2006.3.9) ●細見卓大蔵省顧問「通貨外交の確立を」(1973.4.23)

**今後の行事予定 (5/2現在)**

- 5.15 (月) 15:00~16:30 (10階ホール)  
研究会「北朝鮮」⑥  
田中均前外務審議官  
18:00~19:55 (10階ホール)  
試写会「雪に願うこと」
- 5.20 (土) 14:00~15:45 (10階ホール)  
試写会「蟻の兵隊」
- 5.29 (月) 15:00~16:30 (10階ホール)  
研究会「臓器移植法改正」  
河野太郎自民党議員、齊藤鉄夫公明党議員

行事案内専用電話 03-3503-3764

日時の変更なども含め、最新のクラブ行事をテープでお知らせしています。

## 写真回廊

撮影 中村 光一 (読売新聞社  
ロンドン支局)



「若者雇用策」の全面撤回を求めて氣勢をあげた学生たち パリ市内 = (4.7)

### 思いの深度

いいですねー、人が思い切り声を上げている姿というのは。

3月から4月にかけて、フランスで燃えあがった新雇用法反対運動は全土に広がって、われわれからすると天文学的な数の人間を街頭行動に駆り立てた。

この写真は4月7日のパリだそうだが、4日には全国で主催者発表310万、警察発表103万(なぜかちやうど3分の1というのは妙だが)もの人たちが参加した、というのだからビックリ。

民主主義は選挙という制度が命だが、この制度には集計された数の大きさだけが意味を持ち、一票一票にこめられた思いの温度、深度は勘定に入らないという物足りなさがつきまとう。考え抜いた一票も「刺客、かっこいい!」だけの一票も同じ重さというのが困った点である。だから選挙さえあればいいというわけではないのだ。政治家の目には小さな一枚の投票用紙としか見えない人間たちが、時には生身をさらして、一つの意思をぶつけることで、選挙ではできないこともできる。フランス政府は問題の法案を撤回したのだから。

それにしてもこの写真、青春映画の一場面のように美しい。それどころじゃない!と、叱られるかもしれないが。

(田畑光永)